



本朝名公墨寶卷之下

目錄

八幡山惺惺

雄德山松花堂惺翁

花下忘歸因  
美京樽前勳  
醉是喜風

さくら花はふ

さくら花

斜 かしらる

の かしらる

あ

位 細沙箱

湖 落 曉

花 経 唯

さくら花

了了了了了了了了了了

月夜之松風吟

夜之松風吟

夜之松風吟

如女韶光

知如之

今宵深宿

在祐安

氣者心之

主也如心也

中付心也

此

心之

心之

羽踏落花相

伴出暮首隨花

鳥一時來

あゝ 羅ちふまは

—— たらせむ

ふじかして

なにかいれぬ

あつちかむける

衣帯

背 鏢 物

福 袋

子 子 富 物

者 母 箱

きりぎりす

きりぎりす

花のま

きりぎりす

きりぎりす

きりぎりす

きりぎりす

あま

秋

松

きりぎりす

孫河文意

名山曲

文意多矣

在天下



ちりきり

ふちり

り

けり

玉

枕必雨洞

新秋地

相多風涼

多

風浪昨夜

靜了 跡然

空海及明都

海 子母

都 子母

あ 子母

あ 子母

あ 子母

波 子母

三川と成貴

カニと心あ

相心

夫。子乳

を

車 中を

を

三 塚 岸

雪花は初

白

一夜中

お

霜美あ

夜を寝る

寝る

寝る

寝る

寝る

寝る

寝る

寝る

寝る

雲

ノ

ノ

ノ

ノ

晴

精

花

鳥

わさくら

ましろなほ

えいせい

かきく

あはれ

くさくさ

若使菜坊

並み好味

有る心楽

不心之

晨明のうら

くそよれさ

若

心あま

うひくおね

とれは

報類曉興

女形老

学深る

心寒

夜過山  
線海龍聲  
空城浪  
酒身之氣

今  
の  
山  
あ  
あ  
あ



1  
ふみぬむれ  
むらぬれ  
くつぬれ  
たすのけ乃  
ふちふし

ニ  
山  
人

ぬる  
ぬ

之  
角

及  
子  
子

うしろをふりかへ

かみかみやう

秋の月

雲をよみこみ

あふやうに

向晚簾以

生白露

終夜床底

見青し

大子  
~~~~  
~~~~  
~~~~

後  
~~~~  
~~~~

~~~~  
~~~~

~~~~  
~~~~  
~~~~

~~~~  
~~~~  
~~~~

~~~~  
~~~~  
~~~~

~~~~  
~~~~  
~~~~

~~~~  
~~~~  
~~~~

~~~~  
~~~~  
~~~~

乃々々々々々

乃々々々々々

乃々々々

乃の乃乃乃乃

乃乃乃乃乃乃

長生殿

乃乃乃乃乃乃

不老門

乃乃乃乃乃乃

よるのよる

これいふは

あむた

きり

きり

山市晴嵐

一竿酒旗斜陽意

数簇人家煙渚中

山路醉眠

歸去晚

太平無日

不喜風

まゝ。葉の音

うへに

まゝ

あゝ

まゝ

遠浦歸帆

鷺島青山一抹秋

浪平碧浪橋三渡

歸棹漸入

暮色花去

長在夕陽

江之頭

風むらさき

浪さし

清き世に如解

ふりかへる人

漁村夕照

薄暮沙汀成影

稿

江南江上閑魚鱗



呼幸貫酒

大品孫

引表西風

桑下花

なみののうきさかふか  
此

泣くはれみく  
此

よけさか  
此

のやふ

遠寺晚鐘

雲遮不見梵王宮  
殷之鐘聲訢晚風

此去上方

猶遠近

為言只在

此山中

く 驚く 驚く 驚く

漢

か ね の ね の ね の

今

今 ち ね ね ね

平沙落雁

古 字 考 略 漢

星 積

幾 何 秋 心 行

善正語作

御湯

籍向糾

利糸細

向あき

のさし

海

のさし

のさし

洞庭秋月

西風剪剪出蒼蒼

三首

多頃烟波涵桂花

漁舟不知

歸客恨

直吹寒秋

三首

秋

秋風吹木末  
木末凋落  
木末凋落

木末凋落  
木末凋落  
木末凋落

力學  
力學  
力學

拉  
拉  
拉

滿湘夜雨

先自望江易新統

凍雲粘雨濕蒼昏

孤燈遙志

新篇意

紙白竹枝

詠海痕

石中よひ

たのしみしるし

よまのあはれ

かきとる家

新法にた

江天暮雪

書法之得精玉露

扁舟一葉少風波

以字

新濤呼喚

兩聲擗

新色山陰

新色山人



あゝの繁みりるる

好ももふ。あゝ

漢

予もはのまは

ゆるりるる

古人學書者未有不從門入蘓公終爲  
非家珍寶知蘓公語病如彼鍾繇受羣  
仲將羲之學衛夫人者有故子若公墨  
寶者何 本朝諸名公之墨刻也  
本邦自古未見有勤珉刻木之帖是非  
乏其人而好事者鮮矣一日或人以此  
事求我予假借所知家藏極究目力臨  
模鐫刻者若干人若干帖或行草或假

名惟急於成帙有不得廣蒐博采之遺  
憾然墨寶之嗜好淳化之遺意也於是  
可見龍飛虎跳風雲浮動之姿縱雖無  
神采望其面目者也若臨池者步其蹊  
逕知其端倪者庶幾一助云爾

延寶三乙卯年三月廿日

平西王孫法書

